

17回忌を迎えて

託された荷は重かった

中西文子

三池大爆発事故から、あと三ヶ月で十六年の月日が過ぎ去ろうとしている。今静かに、主人にき

抱いた孫に語る怒り

中村恒子

一九六三年十一月九日。三池大爆発のいまだいよの日に、十七年。暑いさきゅうにまたまた、お盆が参りました。ひとり静かに、仏さまをお迎えする。今年で十六回忌を数えることになりましたが、本当に長い長い歳月でした。

心優しい夫に支えられて生きてきた病弱な私が、三井の保安監視による爆発によって突然夫を奪われたその日から、母子三人が生きるための闘いがはじまりました。

造成職場にも

減量合理化の波

ヤブ蚊と悪臭の中の新港作業所

新港作業所では、雨が降れば雨り(CO患者)に共通する症状の一もいよいよ道。休憩所には、ムカデとナメタジが徘徊し、梅雨の明けからは、貯木場からの犬の糞のような悪臭が流れ込む。社宅周辺の雑草の茂みからはヤブ蚊がおしかけ、蟬の鳴き声と耳鳴

このため、職場の仲間が六月と七月に続いて入院を余儀なくされ、たとえ出勤している者の間にも、「この夏無事にこるなうか」という不安が高まっていく。手をつけようと思いません。六月に退職した係員の補充はされず、CO患者で障害等級五級の係員と、定年を過ぎた一人の嘱託係員とでは、労働者の健康管理どころか、現場からの要求について「私ではわかりません。係長に話してください」と、とまどく耳を貸す力もなく、そのせ私たちが監視するように、現場をウロウロ歩きまわっています。

聞くとこのところによると、友山である三井山野鉾でもすでに遺族会が結成され、共同の敵——三井山野鉾の犯した罪悪を黒白をつけるべく裁判闘争を取り組んでいられると聞く。私事で申し訳ないが、私も

九・二八などの裁判は、いずれも三井山野鉾が作った罪悪を黒白にするための裁判闘争にすぎない。一片の良心があるなら、標を正し、私達の訴えを心から聞き、涙と怒りの遺族と患者に、完全な生活・治療を進捗すべきであると思う。

村松 進さん(万田作業所)、大牟田市立病院に入院中。七、七月二十一日退院、自宅療養中。七、七月二十四日、CO患者「沢田丈夫さん(新港作業所)」の蔵父が逝去されました。謹んで哀悼の意を表します。

雑念捨て三井追及を

◎患者 佐藤 勉

勉

CO中毒という、一生消えない烙印を押され、ともすれば白眼視されることさえある今日、私達患者は組合を信じ、同志を信じ、三井山野鉾に、自ら犯した大量殺人の罪の報いを、骨の髄まで知らさなくてはならぬ。そうすることが生きた私達の、亡き人々へのなぐりでもあろうとするなら、今こそ一切の雑念を捨て、大量殺人の罪悪を犯した三井山野鉾を世論の訴えを心から聞き、涙と怒りの遺族と患者に、完全な生活・治療を進捗すべきであると思う。

手記

フリッピンで暮らしていた私は、昭和二十年の五月、大東亜戦争の末期、原田中将の命令で、タモガンという山奥に避難し、砲火のなかを逃げ回りながら、幸わいのして八月十五日の終戦の日を迎えました。

八歳だった長男と、六歳だった次男をつれて郷里に引き揚げ、あと三池大爆発に就職しました。そのなかで子どもは、同じように諏訪小学校、右京中学、山野鉾学校(三井山野鉾)を卒業。三池大爆発に動かれたわら、三池工業高専を卒業。その後は、長男は通気、次男は探検工として働いているうち、二人とも大爆発で死亡しました。長男が二十五歳、次男が二十三歳でした。

あの日、サイレンを鳴らしながら救急車の走る夜道を、飛ぶ思いで病院に駆けつけました。いくら探してもついに長男は見当たりませんでした。長男の嫁は、そのときやっと誕生を過ぎたばかりの子どもを背に負っていました。翌朝の九時の頃、裏の新館の方でトラックの音

新たな悲しみと怒り

何のために外地から引き揚げたのか

遺族 溝口生松

「ん」といって聞いたかと思うと、腰を抜かしてその場にうずくまってしまう。その夜、遺体安置所に当たられた体で長男の遺体を迎え、その頃住んでいた新港社宅につれ帰

原住国消息

7月20日 原告団編集会議。
27日 原告団事務局会議。
(4)裁判取り組みについて。(5)定期総会について。

退院 村松 進さん(万田作業所)、大牟田市立病院に入院中。七、七月二十一日退院、自宅療養中。